

凝視と幻視

コンラッドの「秘密の共有者」について

林 和 仁

Summary

Reality and Vision: A Study of Conrad's "The Secret Sharer"

Kazuhito Hayashi

As the story of the double, "The Secret Sharer" abounds in repetition, especially the visual repetition perceived through the sense of sight such as "the two small clumps of trees, one on each side of the only fault in the impeccable joint" and "the uncanny sight of a double captain busy talking in whispers with his other self." These visual images, however, are often imaginary and do not exist in reality. The opening scene of the Gulf of Siam, for example, is full of absent images. To "stare" at reality and to "see" vision reflect two kinds of approaches to reality and truth: understanding of the reality by logocentric reasoning and perception of truth through pathos.

The young captain, newly appointed to a strange ship in his first voyage as the skipper, shows every sign of uneasiness and loneliness, and he also reveals his optimistic approach to reality and his easy tendency to escape to sweet dreams. In order to regain his self-confidence and to obtain the crew's trust, he has to learn to "stare" at the harsh reality, and understand the situation objectively through logos. At the same time, he has to visualize that which is not there, and "see" through pathos the truth beyond reason. By sheltering Leggatt, a criminal in "the day's logic," the captain puts himself, his ship and his crew all in jeopardy. In the process of suffering together and sharing his life with his double, the captain learns to face the stern reality by overcoming his fear, and proves himself a trustworthy captain. Simultaneously, by "seeing" himself in a vision wandering as Leggatt in an unknown land, he understands the truth in "the night's irrationality."

ジョセフ・コンラッド (Joseph Conrad) が1910年に発表した短編小説「秘密の共有者」“The Secret Sharer” は、初めて船長として船を指揮する、名前が与えられていない若い船長と、その分身とみなされる、殺人を犯して船長に匿われる一等航海士レガット “Leggatt” を中心とする物語である。顕在的なドッペルゲンガー “Doppelgänger” もしくはダブル “double” の登場する（と語られる）話であり、全体の枠組みとしては、この船長による一人称の語り、数十年後の回想という形式をとっている。分身という反復を主題とする物語によくあるように、この作品にも構成、プロット、登場人物、さらには文体のレベルにおいても、反復が多く見られる。それも「視覚」によるイメージの反復が圧倒的である。分身という存在そのものが、幻覚にせよ、実感にせよ、本質的には視覚によるものであることを考えれば、当然とも思えるが、単に単語を取り上げただけでも、「秘密の共有者」では冒頭から、「見える」“look,” 「目」“eyes,” 「視界」“sight” 等の視覚に関する言葉が夥しく使用されており、僅か50ページ余りの作品に300語余りを数えることが出来る。コンラッド自身、1898年出版の『ナースサス号の黒人』*The Nigger of the “Narsissus”* の序文で、「私がなしとげようとしている仕事は、書かれた言葉の力でもって、あなた方に聞かせ、感じさせ、何よりも見させる “make you see” ことなのです」と小説においては、読者の視覚に訴えることが作者の任務であると強調している。それにしても「秘密の共有者」における視覚にかかわる言葉の数は、同時期に書かれたコンラッドの他の作品と比べてもはるかに多く、この作品の中で語られる「見える」状態、「見る」行為の重要性を示唆しているようである。

また「秘密の共有者」を読む際に、ストールマン (R. W. Stallman) の古典的な質問に代表される、解釈の鍵としての二つの問題がある。「(1) なぜ船長はこの特定のよそ者のために、船を危険にさらすのか、他の誰のためであっても、そうしようとは思っていないのに? (2) なぜ船長は船を出来得る限り岸に近寄せなくてはならないのか?」(279) この二つの問いはお互いに関連していると思われるが、それに答えるには、この作品の中で描かれている二つの物の見方、またその見方を生み出す、二つの考え方を検討する必要がある。ロゴス中心の物のとらえ方とパトス中心のとらえ方である。小論では「視覚」を手掛かりとして、この二つの認識の違いを探ってみたい。

視覚的表現の一例として、風景描写が考えられるが、コンラッドの語り口の特徴ともいえる、視点人物の思想、感情や、状況の象徴的な暗示が込められた情景は、ときには語り手の心象風景に近いものになる。特に「秘密の共有者」においては、そのような心理的光景が多く見受けられる。すなわち視覚による描写であっても、「～のように見える」“seem” ものであったり、「あたかも」“as if” という仮定によって、現実の客観的な描写というよりは、非常に主観的な思い入れによって、眼前にないものを想像して表象している場合が多い。典型的な例が、この短編小説の舞台を設定し、基調を示し、読者を小説の世界に誘う上で最も大切と思われる、冒頭の文章である。長くなるが、小論で取り上げたい要素が端的に現れているとも思えるので、第

一ページの第一パラグラフを半分ほど引用してみたい。イタリック体および下線部は筆者が付け加えたものである。

On my right hand there were lines of fishing-stakes resembling a mysterious system of half-submerged bamboo fences, incomprehensible in its division of the domain of tropical fishes, and crazy of aspect as if abandoned for ever by some nomad tribe of fishermen now gone to the other end of the ocean; for there was no sign of human habitation as far as the eye could reach. To the left a group of barren islets, suggesting ruins of stone walls, towers, and blockhouses, had its foundations set in a blue sea that itself looked solid, so still and stable did it lie below my feet; even the track of light from the westering sun shone smoothly, without that animated glitter which tells of an imperceptible ripple. And when I turned my head to take a parting glance at the tug which had just left us anchored outside the bar, I saw the straight line of the flat shore joined to the stable sea, edge to edge, with a perfect and unmarked closeness, in one levelled floor half brown, half blue under the enormous dome of the sky. Corresponding in their insignificance to the islets of the sea, two small clumps of trees, one on each side of the only fault in the impeccable joint, marked the mouth of the river Meinam (91)

視点人物である船長による、この風景描写には、下線で示したように視覚を表す単語が多用されており、読者は、最初の舞台であるシャム湾に停泊している船から見たエキゾチックな光景を、心に思い浮かべるかもしれない。しかしよく読むと、「熱帯魚の棲家の区切り」も「転々として漁をして廻るどこかの種族」も「大海の向こうの果て」も「人の住んでいる気配」も「石垣か塔か、あるいは防塞の廃墟」も「ちかちか輝いて目に見えぬ小波のあることを教えてくれる光」も現実にはそこに存在しないものばかりであり、船長の想像力の豊かさを思わせる主観的な「不在」の描写である。ダンの詩行「もし汝、目に見えぬものを見る、不思議な視力を持って生まれてきたならば」を連想させるこの設定は、分身を「見る」ことが出来るのは船長だけであることと考え合わせてみると、レガットの存在をより曖昧なものにする効果がある。

イタリック体で示した“as if”という仮定の表現は、それが現実とは違うことを明記することによって、光景をいっそう現実から遠ざけてしまう。また「見渡す限り」(as far as the eye could reach)という限定的な表現には、裏の情景として「目の届かない」場所が暗示されており「不在の存在」を感じさせる。さらに「謎めいた」「mysterious,」「不可解な」「incomprehensible,」「むちゃくちゃな」「crazy」などの言葉は、単に異国的なもの珍しさを表すというよりは、西洋的な常識や理性だけでは通用しない、この短編の世界を暗示している。タイトルにある「秘密」「secret」という言葉とあいまって、神秘性、非現実性を強調することで、超自然的な意味合いを含むこのフィクションの主題にふさわしい基調を作り出している。

また「～に似た」“resembling”や「～を思わせる」“suggesting”それに「～と対応して」“Corresponding”も二つのものの相似関係や対応を示す言葉であって、船長とレガットの曖昧な関係を予告しているようである。それに加えて、この冒頭の文章には、ダブルの物語に呼応して、文のレベルでの二元的用法の、反復や対比を提示する対句表現が多く見られる。「私の右手には」と「左手には」、「平たい海岸の真っすぐな線」と「じっとして動かぬ海」が「見分けのつかないくらいぴったり互いに接し合い」、「なかば茶色」で「なかば青い」境界線の切れた箇所「左右両端」に「ちっぽけな木立がそれぞれ」にある。音のレベルでも、“set in the blue sea ... solid, so still and stable”とか“saw the straight line ... the stable sea”それに“edge to edge”や“half brown, half blue”と頭韻を多用して、反復の印象を強めている。

このような視覚の強調は冒頭の文章だけではなく、全編に互っているのだが、作品の語り手であり、レガット以上に主人公としてふさわしい登場人物である船長は先に述べたように、そこに存在しないものを「見る」かわりに、そこにあっても見ていない、あるいは見ていても知覚していない場合がある。顕著な例として、船長とレガットが初めて出会う場面がある。夜の海を泳いで来たレガットを見て、船長は、「体は完全に揃っていたが、頭がなかった。首なしの死体だ!」“He was complete but for the head. A headless corpse!” (97) と驚愕する。コンラッドが1910年に『ハーバース月刊紙』にこの短編を掲載した時には、「首なしの死体だ!」の文はなかった。単行本に収める際に新しく付け加えられたこの文は、船長の驚きをさらに鮮明に視覚化して訴えており、同時に無気味な雰囲気をも強める効果がある。この場合は、俯いていたレガットの黒い髪の毛が闇にまぎれたため、見えなかったのだと解釈出来るだろう。しかし船長は、次第に見たくないものを見なくなる。レガットを探しに船が来たことを告げられた時、船長はレガットが「ぎくっとしたのを見た」“I saw him give a start”ののだが、すぐ後に「彼は終始身動きひとつもしなかったように見えた」“His immobility seemed to have never been disturbed” (115) と自ら見たことを否定しようとする。レガットを理想化している船長には、レガットの臆病さは「見たくない」ものであり、いつの間にか「見えない」ものになってしまう。

またこの船長は引用した冒頭のパラグラフでは、海を「固まりついたように、じっとして動かずに」とか「安定した」ものと見ている。元来液体であるから流動的で不安定なはずの海をこのようにとらえることで、船乗りとしての海への信頼を表していると理解出来るかもしれないが、それよりは船長の願望の現れと解釈したほうがよいのかもしれない。というのも初めて船長として指揮を任された語り手は、殆ど知らない乗組員について「私は進んで部下の仕事の能力を信用することにした」(93) と楽観的に、現実とはともかく、自分にとって都合のよい見方を採用しているからである。さらには船長自ら、異例の「停泊当直」“anchor-watch”（これも元来視覚を表す単語である）を引き受けて、「陸の不安に比べて海がなんと平安なことか——心をかき乱す問題も起こらず、訴えるものは至極まっとうで、目ざすところも単純素朴な、海という根元的でしかも倫理的な美しさを備えた、この安全な生活を私が選んでよかった」(96) と単純に喜んでいるのである。これは後に起こる事件に対する皮肉な伏線のひとつであるが、単

純素朴なのは船長なのであって、良くいえば理想的な、悪くいえば皮相的、非現実的な船長の見方、見たいものしか見えない、手前勝手な「視覚」の一例である。

またここに表現される、陸と海との単純な二分化は、スタイナー (Joan E. Steiner) も指摘しているように、船長が内なる「二重性をだんだん強く感じ始めていることの反映」(104)と解釈出来るし、冒頭のパラグラフの海と陸との調和のとれた併置にある「ただ一つ切れた箇所」は、船長の単純な二分化に生じるほころびの予徴と読める。上の引用にもあるように、船長は陸が意味するものに強い反感を抱いている。船が港にある間は「関係のない陸の人間どもにわずらわされていた」(95)とか、レガットを探しに来たセフォーラ号の船長に「あなたの船の一等航海士を、何としてでも陸の連中に引き渡したいとお考えでしたね」(118)と言ったりする。若い船長の陸に対する反感は、海に対する思い入れの裏返しであるが、この物語は陸と海とを明確に切り放す、船長の素朴な二元論の破綻を描いているとも読めるのではないか。

「秘密の共有者」が最初『ハーパーズ月刊誌』に掲載された時には「海で起こった話」“An Episode from the Sea”と副題が付けられていたが、単行本に収録する際には、「海岸で起こった話」“An Episode from the Coast”とわざわざ書き直されている。さらにこの物語を収めた短編集には『陸と海のあいだ』*Twixt Land and Sea* という題が付けられている。ちなみに他の二つの短編は「運命の微笑：港の物語」“A Smile of Fortune : Harbour Story”と「七つ島のフレヤ：浅い海の話」“Freya of the Seven Isles : A Story of Shallow Waters”であって、いずれも陸と海の間を示す副題が付いている。「秘密の共有者」の舞台も、海上ではあるが、外洋ではなくシャム湾の海岸沿いに進む船の上に設定されている。この物語は、文字どおり「陸と海のあいだ」、船長の単純な二元化には当て嵌まらない場所で起こるのであり、殺人を犯したレガットを匿う船長は、陸の法律と海の男の絆の間で悩むことになるのである。また最後の場面では陸と海の接点である島の、聳え立つ崖すれすれに船を進めて行くことで、レガットの脱出を助け、自分の船長としての力量が試されることになる。

何かと何かの間こそ船長の置かれている場所であって、冒頭で触れた二つの物の見方、とらえ方も、船長の態度、行動を左右する認識の二つのタイプであって、船長は両極端の間を揺れ動いているのである。一つは髯面の一等航海士に代表される「ほとんど何でも彼でも『納得いくよう説明をつけ』たがる」“he ‘liked to account to himself’ for practically everything” (94) とらえ方である。一等航海士が自分の船室で見つけた蠍の存在理由を説明しようと考え込んでいるのを、船長はからかい半分に見守っている。この一等航海士には、若い二等航海士のきまぐれが「納得いかない」“could not account for” のであっていまましい表情になる。物事を「納得いくよう説明する」とらえ方は理想的、論理的であって、ロゴス中心主義である。「昼の論理」と言い換えても良いだろう。現実をとらえるには欠くことが出来ない認識の型であって、視覚に置き換えてみれば「凝視」がその一つと考えられる。

このとらえ方が含む危険は、一等航海士のように皮相的な説明で満足してしまうことであり、また説明出来ないことに会おうと、適切な対処が出来なくなってしまうことである。船長はこのとらえ方に批判的なのであるが、いつの間にか自分自身、表面的な理屈付けに終わって

しまっている。船長自らが停泊当直をしたことを「私がよそ者でなじまぬ気持のために眠れなくなり、それでこんな異例の処置をとるつもりになったのである」(95)と自分の奇矯な行動を、説明することで正当化している。また船長は縄梯子を引っ張っても動かないのに気づき、「私はすっかり仰天して、身動きもせず、あの間抜けな一等航海士よろしく納得いくよう説明をつけようとした」(97)のである。

視覚的な現実認識の一方に「凝視」があるとすれば、その反対の極に上っ面だけを眺めて自分に都合の良い解釈をするという、問題のある「見方」がある。停泊当直を引き受けた船長は、海の「安全な生活」の象徴として停泊燈を見ており、その炎が「ゆらぎもせず、安心して、夜の神秘の暗闇の中であかあかと燃えていた」(96)と眺めているのは、船長の認識不足をあらわしている。船長は船の位置を示す停泊燈によって、他の船との衝突が免れ、この船の安全が保証されているという一面しか見ておらず、なぜ停泊燈が必要とされるのかについて、考えもしないのである。そもそもすべてのトラブルの元凶は、皮肉なことに、この停泊燈を目指してレガットが泳いで来たことにある。

船長はレガットと話している時に「突然私は、ものすごい頬髯をはやし、『とんでもない——まさか』程度の頭しか持ち合わせていない間抜けな一等航海士のことを思い出した」(101)のだが、船長がレガットの存在およびレガットが意味することが「納得いくよう説明」出来ないと感じているからであろう。レガットが陸地の法律によって裁かれるのを拒否しているのも「かつらを被った爺さんや十二人のご立派な商人衆に向かってこんなことを説明」(131)しても無駄なことが分かっているからである。極限状態においてなされたレガットの行動はロゴス中心の「昼の論理」では説明出来ないものなのである。

もう一つの物のとらえ方は、レガットに代表される非合理的、直感的な見方で、パトスを重視するものであり、「昼の論理」と対照的に、「夜の不条理」と名付けても良いだろう。出会ったばかりの船長とレガットが「私たち二人にはすでに謎めいた心の通い合いがあった」(99)と感じるのを始まりとして、レガットが繰り返して船長に言う「もうすっかりおわかりでしょう」(132)とか「よくわかってくださいました。はじめから終わりまで」(136)といった、理屈を越えた理解、説明を必要としない共感である。不条理であっても本質的に真実であることを、そのまま受けとめる能力と言っても良い。視覚的に置き換えると、現実に存在しない物を見ることであって、妄想によって見える「幻覚」と区別するために、本質的な理解を伴った意味で「幻視」という言葉を小論では使用したい。

さて船長の置かれている状況であるが、初めての船長としての任務であり、「私が船にたいしてよそ者で、なじんでいないということ・・・自分自身にとってもいささかよそ者の他人みたいなところがあった。二等航海士を別とすれば船でいちばんの年若、完全に責任ある地位につく試練をまだ受けたことがなかった」(93)と、二重に「よそ者」「stranger」である点が強調されている。さらに船長は早く「よそ者」の状態から抜け出して、自分も船の一員であることを示す気持もあったのか、徹夜で仕事をした船員達を休ませ、「停泊当直」を自ら名乗り出る。しかしかえってそのために「私——このなじみの薄いよそ者——自身奇妙な振舞だということを

痛感」(95)してしまう。しかもこの異例の行動によって、船長はこの船でただ一人、もう一人の真の「よそ者」、レガットを「発見」し、匿うことになってしまう。レガット自身セフォーラ号では「よそ者」であったし、船長はレガットと自分を繰り返して、「この船でただ二人のよそ者同士」「the only strangers on board」と呼んでいる。

この船長の「よそ者」意識は悪化するばかりで、殆ど最後の部分に至っても、「この俺は船にとって全くの赤の他人なんだ」「a total stranger」(141)と嘆いている。向こう見ずとも思われる、大胆な操船で危機を脱した船長は、ようやく最後のページになって、「私は船と二人きりになった。そうだ！この世の何ものといえども、私と船の間に入り込むことは出来ない」「I was alone with her. Nothing! no one in the world should stand now between us」(143)と船との一体感を表している。冒頭のパラグラフの最後の行に「そして残されたものは、私と、シム湾のいちばん奥に停泊している私の船だけである」「I was left alone with my ship, anchored at the head of the Gulf of Siam」(92)と同じ言葉「独り」「alone」が使われているが、ここでは船長の孤独感を表す、他と切り放された「独り」であり、最後の場面では一体感を示す、何にも邪魔されない「独り」という意味に変化している。

「秘密の共有者」を船長と船および乗組員の関係でとらえれば、孤独な「よそ者」の船長は、より疎外された、いわば“strange”の比較級“strange-r”のレガットを船長室に隠すことで、お互いの孤独を秘密に共有することになり、その緊張で乗組員との間にますます疎隔が生じてしまう。レガットは船長と乗組員の仲を引き裂く侵入者でもある。確かにヒューウィット(Douglas Hewitt)が指摘するように、「船長は逃亡者を匿うことを意識して決めたのではない」(72)のであって、船長の反対がないまま、レガットが船に乗り込んで来るのである。そしてレガットを逃してやった船長は自分の半身を無くした気持ちに襲われ、より一層の孤独感を味わう。船長は船と共に生死を賭けた行動をとることによって、レガットの存在を忘れ、通過儀礼を完了し、乗組員の信頼を獲得し、初めて船との一体感を手にいれるというイニシエーションの物語と読むことも可能であろう。

ただレガットを侵入者とだけとらえると、船長の描く人物像と大きなずれを生じることになる。明らかに、船長の目に映るレガットは「誰もがひとりでひそかに考えている自分というものの理想の姿」(94)である。「彼はなかなかりっぱな顔立ちをしていた。りっぱな口もと、いくぶん太い濃い眉毛に明るい目、すべすべした四角い額、髯のはえていない頬、僅かにはえた褐色の口髭、円い格好のよい顎・・・彼は白いよく揃った歯で下唇を噛んだ」(100)と殆ど類型化されたと言っても良い姿である。この描写を、同じく初対面のアーチボールド船長(名前もはっきり覚えていないのであるが)の寸描と比べてみれば、いかにレガットは好意的に見られているかが、より鮮明になるだろう。

「セフォーラ号の船長は顔のまわりいっばいに赤い髯をぼやぼやと生やし、同じ色の髪の毛によく似合う顔色をしていた。それから目の色は独特のよどんだ青色だった。怒り肩で丈は中くらい——片方の足がもう一方に比べて外に曲がり気味で、特に見映えのする体格というほどでもない。彼はぼんやりとあたりを見廻しながら握手をした。私の判断によれば、ねちねちと

頑固なのがこの男の主な特質だ」(115-16)と、レガットと対照的に、視点人物の悪意さえ感じられる、偏見に満ちた見方である。初出の『ハーパーズ月刊誌』では、アーチボールド船長の目が、よりニュートラルな表現である「濃い青色」“intense shade of blue”であったのを、蔑視的な「よどんだ」“smeary”と直したことからも、作者の意図は明らかである。船長の観察は好悪の感情が強く込められた主観的な描写なのである。現に一等航海士はアーチボールド船長を、「なかなかりっぱな人のようですね」と評している。

とすれば逆に、船長の描く理想的なレガット像も、そのまま文字どおり受け取るのは危険だということになる。船長はレガットの「顔つきはなにかある一つの考えに集中しているようで、ちょうど独りぼっちで思いつめている男といったふうだった」(100)と言うことで、まるで自分の置かれている状態を、レガットに当て嵌めて述べているようである。またレガットが殺人を犯したことを話し始めると、会ったばかりなのに『『かっとなったのだね』私はうち解けた様子で助け舟を出し』(101)たりする。すぐ後でも「私の分身が決して殺人鬼なんかでないこともわかっていた」(102)とレガットを完全に信頼している。それは船長が自分とレガットを同一視していたからである。「私がもう一着の寝間着を着たもう一人の自分であるかのように、事件のなりゆきが私にはよくわかったからだ」“I saw it all going on as though I were myself inside that other sleeping-suit” (102)。ここでも船長は仮定の条件付きではあるが、レガットになりかわって、事件を「見て」いる。

船長はレガットについて「やつれた様子こそしていたが、彼はいつも完全に自制心をそなえ、落ち着き以上のもの——侵しがたいほどのものをもっているようだった」(127)と述べるとき、殆どレガットの欠点が目に入っていないようである。船長が考える程にはレガットは冷静沈着でいるわけではない。初めて船長に姿を見られたレガットは「やや心配そうに、『おい、誰も呼ばなくてもいいよ』」(98)と声を掛けるし、甲板の足音を聞いて、「私の分身は心配そうに、文字どおり私の耳の中へささやいた」(109)のである。先程引用した箇所でも、捜索隊の到着を聞いて、レガットは「ぎくっとした」のであるが、船長はそのことを認めようとはしないのである。スタイナーによると「船長は、自分とレガットを同一視しているにも拘わらず、自分の欠点をレガットの長所と対照させている」(104)のであって、こうありたいと願う、自分の理想をレガットに具現させようとして、実物大以上に立派な存在としてレガットを見ていると言えよう。

レガットの実像を知るには、船長の言葉から虚像を分離し、船長が見なかった、あるいは見ても忘れている、いわば残像から推察するしかないが、レガットの言動に関して、船長が自ら説明をしている部分を見てみたい。レガットはなぜか二回も「私の父はノーフォーク州で牧師をしているのです」(101, 103)と繰り返すが、船長は「きっと彼は前にこの大事なことを喋ったのを忘れてしまったのだろう」(103-04)と簡単に「納得して」深く考えもしない。第一回目に父が牧師であることを告げたときは、レガットが素性正しい家柄の出身であり、レガットの語りに信頼を持たせる効果があって、またそれゆえに、レガットが犯した罪の重さを感じていること、また裁判で裁かれることによって、一族の名誉を汚すことを恐れて脱出をはかったこ

とが推測される。また作者はこの短編における、宗教的な一面を強調したかったとも解釈出来るが、こう短い間に反復されると、自分が牧師の息子であることを明言しなければならない必要性をレガットが感じていることになる。意地悪く読めば、レガットは二度言わないと牧師の息子であることを信じてもらえないからであって、それほど牧師の息子らしく見えないのであろうか。

先に見たようにレガットは、傲慢に聞こえる程、裁判所に代表される社会的な規則に従うことを拒否している。「私に罪があるかないか、連中に何がわかるでしょう——それに、いったい私にどんな罪があるというのです。そんなことは私の問題です」(131-32)。もちろんこの箇所は、船長やカーリー (Daniel Curley) が受け止めているように、より高度な次元で、罪を魂の問題として論じていると解釈することも可能であるが、レガットは自分が殺した相手を「のら犬」“cur” とか「鼠」“rat” と呼んで、人間扱いしていないし、その殺人の行為そのものを悔いている様子もない。レガットは、仮に殺人のことを別としても、かなり衝動的な人物と思われる。セフォラ号で食事後、散歩のために後甲板に出たレガットは「突然誘惑にかられました。スリッパを蹴とばし、はっきり決心する暇もないうちに、もう水の中に」(108) いたのだし、この船に泳ぎ着いて「船長を呼んでくれと言ったのは、その時のはずみ」(111) だと答えている。

カーリーによれば「物語のなかでレガットは、脱出の方法としての暴力を二度否定している」(79) のであるが、繰り返し否定しなければいけないこと自体、レガットの暴力的な一面を明らかに示していると思われる。レガット自身、大嵐のなかでの殺人を「老判事やご立派な陪審員をぎょっとさせるに充分なひどい話でしょう」(103) と自嘲的に語っている。カーリーが言う最初の暴力の否定であるが「私は扉を打ち破ろうなどとは考えもしませんでした。物音を聞いて皆がとんで来て、私を止めようとしたでしょう。私はもう大乱闘はしたくなかったのです。そうなればまた別の男が殺されたかもしれません。だってそうでしょう。戸を破って出たからには、おめおめ押しもどされるだけのつもりじゃありませんからね。それにもうそんなことはご免でした」(106-07) という発言には、暴力の可能性があるから、その機会を作らないという意味よりは、そういう事態が起これば、レガットはまた別の殺人をも辞さないという、決意がより強く伝わって来る。一度自由を手に入れば、人を殺してでもそれを守るという宣言に等しい。二度目の否定「ご免です。真っ裸で、えり首を捕えられ、野獣のようにばたばた抵抗して小島から船へ連れもどされるなんて。きっと人死にが起こるでしょう。私はそんなのはご免でした」“Do you see me being hauled back...” (109) についても同じことが言えよう。より具体的に「野獣のように」“like a wild beast” とあるだけ、さらに過激な暴力行為を視覚的に暗示している。

そういうレガットであればこそ、船室に監禁されていたと納得出来るのであるが、レガット自身は自分の内にある凶暴さを、本当には理解していないように思える。「どうして毎晩錠をかけて私を閉じ込めたのか、私にはわからないのです。連中の誰かの顔を見れば、連中は私が夜中に出歩いて、しめ殺して廻りはしないかと怖がっていたと思ったでしょう。いったい私は人殺しの獣ですか。そんなに見えますか」(106) と自分が「人殺しの獣」“murdering brute” には決

して「見えない」ことを船長に押し付けている。確かに見た目にはその凶暴性が現れていなくとも、レガットが殺人を犯したこと、少なくとも船を守る行為中に一人の船員の死を招いたことは事実である。先の引用にあるように、すぐ後で自らの「暴力行為」の可能性を暗示することで、レガットは無意識に「見掛け」と「本質」の食い違いを示しているのかもしれない。

しかし船長はそのようなレガットを理想化すると同時に、レガットを自らの「分身」“my double”とか「もう一人の私」“my other self”と呼ぶことで、自分との同一性を繰り返し強調する。いくつかの共通点がこの二人には見られるのだが、外見的な相似に付け加えて、二人の着ている寝間着が同じであることが言及される。裸で泳いで来たレガットに、船長が自分のもう一着の寝間着を与えたのだから、同じなのは当然なのに、何度も述べられるのである。初めて「分身」という言葉を使う場面であるが「彼はすぐその濡れた体を私が着ているのと同じ灰色の縞模様の寝間着で隠し、まるで私の分身みたいに私の後について船尾へとやって来た」(100)のであるし、「私の寝間着は彼にぴったりだった」(100)そして「影のさした、私同様の黒い髪の頭が、気味悪い灰色の私の寝間着の上で、見えるか見えぬくらいこっくりをした。夜だったので、まるで私が暗い大きな鏡の奥に映る自分の姿と向かい合っているみたいだった」(101)。また最後の場面で船長がレガットを逃がしてやる時も、船長は一日中寝間着を着ているため、レガットの姿が船長に似ていると語られる。

寝間着については、スタイナーの言うように「無意識の生活にふさわしい衣」(106)であり、精神の「夜の側」の表象ととして、レガットを船長の無意識の投影されたものとも考えることも出来よう。さらにコンラッドは改訂の際に、寝間着の「縞模様」“stripe”をわざわざ付け加えている。その意図は不明であるが、一つの解釈として囚人服への連想を強めたかったためと考えられる。実際レガットは、セフォーラ号では囚人扱いされていたし、船長もじっと俯いているレガットの様子を「灰色の寝間着を着て、黒い髪を短く刈っているので、まるで平然とした、我慢強い囚人みたいだった」(127)と見ている。プリーストリー (Philip Priestley) の『ヴィクトリア朝の囚人生活』によると、囚人達は「1.5 インチ幅の黒い縞の入った」お仕着せを「下着なしに膚に直接」(20-21) 着ていたとあるが、裸体に直接、船長から与えられた縞模様の寝間着を着ているレガットとよく似ている。船長が悩むのは、何をしてもレガットのことが気になり、仕事が手につかないのであって、いわば船長はレガットにとりつかれているのであるが、逆にレガットにしてみれば、船長の意識に囚われているとも言えるのである。レガットは罪を犯したため物質的に不自由な生活を強いられている囚人であると共に、精神的には船長の心に閉じ込められている囚人でもあるのだ。

ところがこの二人の身体的相似点は、体格と髪の色だけであって、船長も認めているように「実際は彼は私に全然似ていなかった」(105)のである。この二人はコンウェイと呼ばれるリヴァプール商船学校出身の船乗りである以外、現実的には共通点はないようであるが、レガットは「私に訴えた。まるで私たちは着ているものだけでなく、経験まで同じだと言わんばかりに」(102)と船長の理解を求め、船長も「もう一着の寝間着を着たもう一人の自分であるかのように」レガットの心を酌む。このように分身の関係をその衣装にまで及ぼしているのは、単なる

外見の相似ではなく、本質的な部分で二人が似通っていることを象徴的に視覚化して表しているのではない。現実的な同一性ではなく、幻視による同一性である。先の引用にもあるように「まるで～のように」「as if, “as though” や「～みたい」「like, “seem” という仮定の表現であることに注意する必要がある。つまりレガットを自らの分身としているのは、船長の想像によるものであって、現実の描写ではないのである。

しばしば船長は自分とレガットがダブルであることを、自分以外の架空の視点を想像して表している。「もし・・・[一等航海士]が私たちの姿を見たならば、きっと彼は、俺は物が二つに見えるのかな、とかあるいは、変てこな船長が自分の灰色の幽霊と舵輪のそばで話しあっているとは、こりゃ気味の悪い魔法の現場に出くわしたかな、と思ったことだろう」(103)と乗組員の一人を想定している。また二人が全く似ていないと述べた直後に、「だが、私たちが寝台の上にかがみ込み、並んでささやきあい、共に黒い髪のを頭を寄せあい、共に背中を戸口のほうに向けて立っているところへ、誰かが大胆にも扉をそっと開けたとしたならば、二人になった船長の一人が、もう一人の自分と忙しくささやき交しているという、気味の悪い光景をまのあたりに見たことであろう」(105)と仮定の視点から二人の姿を想像している。レガットが船長と似て見えるのは、レガットが「ごろりと仰向けになり、一方の腕を目の上にあてた。こんなふうに顔をほとんど隠してしまうと、私とその寝台に寝ているのとそっくりだったに違いない」(111)と顔を隠しているか、「扉を開くと、海図を眺めている私自身の後ろ姿が見えた」(137)と後ろを向いている時だけである。つまりダブルとしてレガットが見えるのは船長の想像の中だけであり、幻視によるものである。

想像力豊かな船長は、アーチボールド船長の目にも自分とレガットが似て見えると思っている。アーチボールド船長は「私を見てなにか自分の探している男のことを思い出し、自分がはじめから疑い、嫌っていた若造にどこか奇妙に似てやしないかという気がして、少なからずうろたえたのだと思う」(120)。自意識過剰な船長であるから、どこにいても人の視線を感じている。最初から「私の振舞を見て人は私を変な奴と思ったかもしれぬ」(97)と人目を気にしており、レガットを置いて以来、その傾向が益々ひどくなって来る。「多少とも批判的な目で私を見ている人間には、私が決断力の乏しい船長に見えたことだろう」(126)とか、動転して給仕にどなってしまった船長を見た「すごい髯面の一等航海士は、人さし指で額をぽんと叩いた。前に奴がデッキで大工と内証話をしていた時、あんな身振りをしたのを見た憶えがある。遠すぎて言葉はわからなかったが、このパントマイムは変てこな新米船長のことをいっているに違いないと思った」(128)と皆が自分の正気を疑っていると、確証もないのに心配している。レガットを逃がすために、不自然な命令を下した後も「あの髯面が何気ないふうを装って、デッキへ上がって来て下からちらちらと私のほうを覗いた・・・たぶん気が狂ったか、酔っぱらっている様子はないかな、と見に来たのだろう」(135)などと、自分が他人にどう「見える」かを常に意識している。

これほど船長に緊張を強いるレガットの存在なのであるが、そもそも本当に存在したのであるか。給仕が突然浴室に上衣を干しに行き、何事もなかったように戻って来たあと、レガ

ットの姿を見て、船長自身、「あれは本当に生身の人間だろうか、という疑念が私の頭をかすめざるをえなかった。ひょっとすると私以外の目には見えないのかな。私は自問した。まるで化物にとっつかれたみたいだった」(130)と自分だけが幻を「見て」いるのではないかと恐れる瞬間もある。レガットは浴槽の中に身を屈めたと説明しているが、船長以外、誰もこの船ではレガットの姿を見ていないことは事実である。興味深いのは、改定版では、給仕は浴室にただ「腕」だけを入れて服を干すのだが、初版では「頭」となっていた。給仕が浴室に「頭」まで突っ込んで、なおかつレガットが見えなかったとすると、レガットの存在があまりにも非現実的になり過ぎることを、コンラッドは避けたのであろう。セフォーラ号のアーチボールド船長が逃亡した船員の話をする前に、船長はレガットに出会い、事情を聞いているから、船長のよっぽどの記憶違いか、作為的なフィクションでない限り、レガットは存在していることになる。たとえ幻であったとしても、船長には「見えて」おり、船長が語るこの物語はレガットの存在を前提としているのだから。

より重要なことはレガットの存在の有無ではなく、レガットを想定することでどういう意味が生じるか、物語全体の中でどういう役割をはたしているかを検討することであろう。冒頭で使われた「謎めいた」「mysterious」という言葉がレガットに付きまとう。海上のレガットを船長は「あの謎」「that mystery」と呼び「やって来た時と同じく謎に包まれたまま、私の見えぬところへと泳ぎ去ろうとしている」「to swim away beyond my ken—mysterious as he came」(98)と思う。少し後でも「謎の来着者」「the mysterious arrival」(105)ととらえている。また少し言葉を交わしただけで、船長とレガットとの間には「謎めいた心の通い合い」「a mysterious communication」(99)が成立している。確かにレガットの存在は「謎めいた」ものであり、船長との関係も理屈を越えた親密さを感じられる。五日間一緒に過ごしただけのレガットのために、船長は船と乗組員の命を賭けるのである。

もし「謎めいた」「mysterious」という言葉をニュートラルな「不思議さ」ととらえるならば、レガットにつきもののもう一つの言葉「無気味な、幽霊のような」「ghostly」は明らかに否定的な「不思議さ」である。先に触れたように、船長は最初レガットを「首なしの死体だ!」と勘違いし、その後も「彼は無気味なくらい銀色で、魚のようだった」(98)と感じ、「気味悪い灰色の私の寝間着」を着たレガットを「自分の灰色の幽霊」と呼んでいる。レガットは「幽霊のように、物音一つ立てずに消えた」(114)のだし、その言葉は「まるで幽霊の言いそうなことだった」(131)。さらに「無気味さ」、「病気」や「死」を連想させる言葉がレガットに関して使用される。「彼の顔はやせこけ、日やけもあせて、病気みたいだった」(105)し、「停泊地は死んだように静まりかえり」(108)、「昼の光で見ると、彼の顔はひどくやせこけていて」(114)「私が生き返るのはいかなんでしょうね」(131)と幽霊のごとくつぶやくのである。あまりに静かに座っているレガットを見て、船長は「何か人間性に反する、人間らしからぬ態度だ」「like something against nature, inhuman」(136)と評する。そして他の乗組員に聞かれるのを恐れて、ささやき声だけで会話を交わしてきたので、お互いの「自然な声を聞いたことがなかった」(137)ことに思いをはせる。

レガットは「いまや私はこの地の面から追放されているのです。夜にやって来た時のように、私は出て行きます」(132)と告げる。レガットは夜に船を訪れ、夜に船を去って行く。「昼日中喋るのはまずいと思った」(115)ので二人は主に夜にささやき声で話をするが、レガットと話していて、船長は「自分自身に向かって内証話をしているようで、奇妙に癪が高ぶって我慢できなかったのだ」(115)と感じている。また二人のささやき声は、「良心の小さな声」“a small voice of conscience”と皮肉に対応している。「運を天の神様にまかせるといっても、罪を犯した彼では無理だろう」(123)とあるように、レガットは殺人により、神の恩寵が受けられない汚れた身であることが指摘され、「日曜で船中が静まりかえっているのが、私たちにあだとなった」(123)ように、聖なる休日と対立する存在であることが示される。レガットの発言に「悪魔」“Devil”とか「地獄の」“hellish”といったもののしり言葉が混じるのは、船乗りの会話であるとしても、暗示的である。船長はレガットが「まるで海の底（実際、そこがこの船にいちばん近い陸地だが）から現われ出た」(98)と言っているが、海の底よりさらに下から来たのかもしれない。

勿論ゲラード (Albert J. Guerard) が警告しているように、「どの登場人物もキリスト像、または悪魔の原型として解釈することが可能である」(204)のだから、あまりレガットを地獄の住人と強調するのも、船長が理想化して描くレガット像を鵜呑みにするのと同じくらい、危険なことかもしれない。コックス (C. B. Cox) のように「カーツと同じく、レガットはその勇氣のために、文明社会の規制の枠を飛び出してしまい、通常の社会的慣習の限界を越えた究極の真実の瞬間に立ち向かう男である」(147)ととるのは、誉め過ぎであろうし、ゲラード以来多くの批評家がとる解釈は、パーマー (John A. Palmer) が要約したように、レガットが「自我の、無法で非理性的な側面を表している」(223)というものであるが、これではレガットの持つ現実的、实际的な一面を無視することになる。

例えばレガットの多用する言葉に日本語では「用事、事件、商売」等の意味が含まれる“business”がある。船長に事情を聞かれてレガットは「とんだ不祥事です」“An ugly business” (100)と答えるし、殺した相手を「生きる資格なんかない情けない奴です」“Miserable devils that have no business to live at all” (101)と呼び、その男の首を絞めたときは「本気だった」“I meant business”と述べる。さらに弟殺しのために刻印を押され追放されるカインに自分をなぞらえて、『カインの刻印』というやつですよ”“The ‘brand of Cain’ business” (107)と言う。日本語の「ビジネス」とは違って英語の口語表現ではよく使われる、あまり強い意味のない言葉ではあるが、やはり最も实际的である、商業を連想させることは否定出来ない。さらに付け加えるならば、レガットは、殺人の罪として追放者の生活を余儀なくされることを「あんなアベルを殺した償いとしてはそれで充分です」“that was price enough to pay for an Abel of that sort” (107)とここでも売買の用語でもって、罰の重さのことを計っているが、こういった言葉の使い方にレガットの实际的、世俗的な一面を垣間見ることが出来る。

そのようなレガットに影響されたのか、レガットが隠れていないことを証明するために、アーチボールドに船の中を見せて歩くことを、船長は「この仕事」“the business”と呼んでいる。

もちろんこれはレガットを「見せない」ための仕事であり、船長は「さんざん怖がらされた後なので、今度は仕返しをしてやりたくなった」(121)のである。先にも述べたが、船長はアーチボールドに対して強い反感、嫌悪感を抱いている。そもそもアーチボールドという名前自体、確かではないのである。「アーチボールドとか何とか言ったが、あれから何年もたった今となってははっきりしない」(116)と年月のせいになっているが、その他の固有名詞、例えばレガットの名前、セフォーラ号、地名などはっきり覚えているし、細かな出来事も再現出来るのである。いやな人物だったので忘れてしまったか、覚えていたくなかったのかもしれない。あるいは、作者の立場から見て、アーチボールドという名前自体、「主たる、大いなる」「arch」+「大胆な、ずぶとい」「bold」と、嵐の中で命令を下せなかった優柔不断な人物につけるには、あまりに見え透いた皮肉だったので、それとなくぼかしたのかもしれない。

アーチボールドに関してもレガット同様、船長の描く姿と実物との間にずれが見られる。船長はセフォーラ号の事件をアーチボールドから聞かされるのであるが、それをレガットの時のように、直接会話として再現しようとはしない。それどころか「彼の物語はここに記すほどのこともない」(117)と、さっさと片付けてしまう。また「よどんだ、青い、愚かそうな目」の持ち主であるアーチボールドが「奇抜な、独創的な」「original」ことなぞするはずがない、と船長は馬鹿にしきって、男が死んだのは大波のせいではないかと反論すると、アーチボールドは絞殺された死体の表情を実演して見せて、船長を驚かす。「いきなり彼が頭を私に近づけ、私に向かって舌を出したので、私はびっくりして思わず後づさりした」(117-18)。まるで蛇か爬虫類を連想させる仕草で、無気味ではあるが、奇抜であることは確かである。さらに船長はアーチボールドと対面しながらも、本当には「見て」いない。「私は礼儀正しくアーチボールド船長(そんな名前だとしたら)を眺めていたが、私が本当に見ていたのはもう一人の男だった」(117)とあるように、船長は眼前のアーチボールドを見ていない。あるいは船長室に潜んでいるレガットの目で、アーチボールドを見ていると考えた方が良いのかもしれない。

レガットがアーチボールドを軽蔑しているのと同様に、アーチボールドはレガットに対して反感を持っている。「私が奴を雇ったのじゃないのです。奴の一族が船の持主に何かコネを持ててましてね。まあいわば無理に雇わされた形なのです。様子もりっぱでしたし、紳士らしいとか何とかでね。でもねえ——どういうわけか、私は虫が好かなかった。私は率直に言います。つまり、奴はセフォーラ号みたいな船の一等航海士にふさわしい男ではなかったのですな」(119)。部下を押し付けられるのは愉快なことではないし、「三十七年間りっぱに船乗りをつとめ、そのうち二十年以上も船長として」やって来た、叩き上げのアーチボールドと、商船学校出身で、若くして上級船員になったレガットの間に反目が生じるのも予想出来る。さらにアーチボールドには、レガットの「紳士らしさ」が癪の種なのである。レガットが侮蔑的に「あの古ぼけた石炭船」「that old coal-wagon」と呼ぶ、セフォーラ号の船長を十七年間もしていることから、あまりうだつの上からぬアーチボールドと将来性に富むレガットとは余りにも違い過ぎるのかもしれない。

また船長も、アーチボールドからレガットが、セフォーラ号にふさわしくないことを聞かさ

れているときに、自分もその船にはふさわしくないと感じる。船長はレガットと共感しているからだ、船長自身、アーチボールドの述べるレガット像と、かなり重なる部分があることを実感している。また船長は初めて船を任された、新米の船長であるのに対して、アーチボールドは経験充分な「船長としてはかなり知られた男」(117)である。さらにスタイナーも指摘していることであるが、アーチボールドは船長にとって「哀れな分身であり、その失敗は、語り手〔船長〕が立ち向かわねばならない、常に存在する危険と、その〔船長の〕地位の不安定さをきわだたせて」(105) いるのである。アーチボールドは船長になるかもしれない、なってはいけない未来像なのである。

もう少し掘り下げて考えると、アーチボールドは船長に、そしてレガットに、そうではなかった過去の自分、なりたくても、なれなかった自分の姿を見ているのだし、船長はアーチボールドに、絶対そうってはならない、未来の自分を見ているがための、お互いに対する反撥なのである。もしレガットが船長にとって、顕在的なダブル、肯定的な分身であるならば、アーチボールドは、潜在的なダブル、否定的な分身と言える。船長はレガットより行動力と大胆さと「夜の不条理」を学び、アーチボールドを反面教師として、危機の際に決断を下すことを学ばねばならない。同時にレガットのように、衝動に駆られて罪を犯して、「闇の世界」に隠れ住むようになってはならないし、アーチボールドが象徴する、社会的に認められた権威と地位を守り、いわば「昼の論理」の秩序をも保つことを目指さねばならない。

レガットがアーチボールドに「船がスンダ海峡を通る時、夜、私の船室の扉に錠をかけないでおくれ」(106)と頼むが、アーチボールドは「こうしたことは然るべき法の筋道をとおさねばならぬ。私はここでは法の代わりをつとめているのだから」(107)という理由で拒否する。いわば「昼の論理」でもってレガットの要求を否定するのである。同じように、レガットは自分を島に棄ててほしいと、船長に頼む。レガットが「現れた時は説明がつくけれど、消えたのは説明がつくまい」(130)などと「昼の論理」に頼ろうとする船長は、最初感傷的な「理由」をたてに拒否する。レガットが「[説明ぬきで] それに、もうすっかりおわかりでしょう、ね」と船長を諭すと、船長は初めて自分の過ちに気づいて、「夜の不条理」を理解し始める。「急に私は自分が恥ずかしくなった。こう言っても嘘ではないが、私にはよくわかった——それに、私が船端から彼を泳いで行かせるのをためらったのは、偽の感傷であり、一種の臆病風だったのだ」(132)。

しかし船長がレガットを真に理解するには、レガットが遭遇したことを、たとえ象徴的なレベルであっても、船長自ら体験する必要がある。レガットを匿うことで、船長は絶え間ない試練を自分に課することになる。その精神的負担により船長は「終始私の頭は二重に働いて、もうちょっとで狂わんばかりになった・・・まるで気が狂ったみたいだった。ただ、はっきりそれを意識しているだけにいっそう悪かっただけである」(113-14)とか「私は実際には気が狂わなかったとしても、いつのまにか本当にあやうくあと一步というところまで迫っていたのだと思う。いわばあの〔レガットの〕身振りが私をおしとどめてくれたのだ」(130)と狂気の状態にまで追い詰められていて、船長が完全に発狂しなかったのはレガットの冷静さのおかげであっ

たと告白している。すぐ後でも「あんなに見事に窮地をきり抜けた彼の強い精神に感嘆したのだ。彼のささやき声は平静だった。あやうく気が狂いかかった男がいたとしても、それは彼ではない。彼は正気だ」(131)と錯乱状態の自分と平静そのもののレガットを対比している。このような船長の精神状態が他人にも感じられるものであったことは、先に引用した給仕や一等航海士の態度にも見られるし、アーチボールドが船長の言うままに船中を引きづり回されるのも、船長の狂気を感じたからではないだろうか。「私がいんぎんに是非どうぞと言う口調に、何かおどしをかけているようなところがあったに違いない。彼は急におとなしくなって、言うことをきいた」(121)。

一方レガットが殺人を犯す嵐の場面にも「狂気」がつきまとう。「いつやむとも知れぬ暴風雨の荒れ狂う音」「the maddening howling of that endless gale」(103)、「荒海なんてものじゃありません——たけり狂った海でした」「It wasn't a heavy sea—it was a sea gone mad!」(124)という悪天候に対応して、アーチボールド船長以下、全員が狂乱状態に陥る。「こんな天気模様の時に、自分の船長が泣き事ばかり言っているのを聞いたら、誰だって頭にきますよ。私はもうやけくそみたいになりました」(124)。レガットの被害者も「恐怖で半狂乱になっていた」(102)のだし、レガットの殺人を目撃した船員達は「気違いみたいに『人殺しだあ!』と怒鳴り・・・船長もやっぱり他の連中同様、おかしくなりだし・・・半狂乱になった」(102-03)のである。レガット自身「恐ろしい天気のため気がたっていた」「I was overdone with this terrific weather」(102)ことがこの惨劇の原因となっている。

しかしそのレガットを船長は繰り返して取り乱している自分と反対に「冷静沈着」、「正気」ととらえている。船長が自らの理想像をレガットに見ているせいもあるが、レガット自身、意識して平静を保っているとも言える。事件の後、船室に閉じ込められたレガットには充分過ぎるほどの熟考の時間があった。「私はこのことを何度も何度も考えぬく時間がありました。六週間もの間、毎晩一時間かそこら後甲板で散歩するのを別として、他に何もすることがなかったのですからね」(105-06)。脱出して夜の海を泳いでいるレガットが恐れていたのは「気違い牛みたいに同じ所をぐるぐる、ぐるぐる泳ぎ廻ること」「the notion of swimming round and round like a crazed bullock」(109)であって、目的のない、あるいは意味のない行動として「狂気」をとらえている。

レガットにとっての「狂気」と「正気」の違いは次の発言に現れているのではないか。「私は入水自殺をするつもりはありませんでした。沈むまで泳ぎ続けるつもりだったのです——でも、それとこれとは同じことじゃありません」(108)。どんなに絶望的な状況にあっても、最後まであきらめずに目的を遂行することが、レガットの信念であり、嵐の中で船を救った行動であるとともに、セフォーラ号を抜け出し、船長室に身を潜め、島に逃れる機会を忍耐強く待つ態度に表されている。それゆえ船長はレガットについて「彼の正気の顔には殺すなという神の呪いの烙印も押されず・・・自ら弁明しようとしないう誇り高い男」(142)と称賛するのである。

ストールマンの第一の質問、なぜ船長はレガットのために船を危険にさらすのか? に戻って

みよう。船長にとってレガットは、自分の「ひそかに考えている理想の姿」であり、強い信念と実際的な実行力をそなえている人物なのである。同時にレガットは霊的な存在でもあって、理屈では説明出来ないパトスによって船長と結ばれている分身なのである。船長がレガットを自分の意識から消去出来ないのと同様に、レガットは船長の心に囚われているのである。船長にとって選択の余地はないのである。レガットが潜んでいる船長室の浴室に、給仕が入って行く物音を聞いて、恐怖におののいている船長は、何事もなかったように給仕が出て来るのを見て、「助かった、と思った。だがちがうぞ！ いなくなっちゃったんだ！ あの男はどこかへ行ってしまったんだ！」“‘Saved,’ I thought. ‘But, no! Lost! Gone! He was gone!’” (129) と動揺するが、この“Lost”という言葉は「いなくなった」という意味に加えて、「私にとって大事なものが失われた」あるいは「私にとっての重要な機会が失われた」、「私はどうしたら良いのだろうか」という解釈も出来る。レガットが「見つからなかった」ために「助かった」と思う船長は、同時にレガットが「いなくなって良かった」と一瞬思い、すぐ否定する。レガットの存在は船長にとって重荷であると共に、なくてはならないものなのである。

第二の問い、なぜ船長は危険をおかしてまでも、船を出来得る限り岸に近づけなくてはならないのか？ については、船長自身「できるだけ船を岸に近寄せるのが、いまや良心の問題となった」“It was now a matter of conscience to shave the land as close as possible” (139) と述べているし、繰り返してレガットが「なぜ私の良心にかけて、こんなに岸に近づけねばならなかったかもわかってくれただろう」(141) と考えている。船と乗組員の命を預かっている船長のとる行動としては言語道断の、実際的な理由では説明出来ない行動である。確かに岸に近いほどレガットがあまり泳がなくてもすむわけだが、メダルを貰うほど優れた泳ぎ手であるレガットは、既に一マイル以上休みなしに泳いだ実績があるし、岸から半マイルもの近さまで寄って船が座礁する危険までおかす理由はない。

だから「理性」の問題ではなく「良心」の問題と称されるのであるが、まず危険な海域で、夜、岸近く船を進めた時の乗組員の反応を見てみよう。二等航海士は「心配そうに」船長の後についており、船長の意図を聞いて「信じられんといったような声でどもった」し、当直の連中は「愕然として口もきけずに見守っている」(139) だけである。一等航海士にいたっては「雷に打たれたみたいな彼は、いわば髯のお蔭でもっていた精神の支えまでなくしてしまったようだった。彼は両手を叩き、文字どおり泣き叫んだ。『もうおしまいだ!』」(140) と狂乱状態に陥っている。嵐の中のセフォーラ号を思い起こさせる光景である。レガットを真に理解するためには、レガットの経験を船長自身体験する必要があったのである。

極限状態を作り出した船長は、職務を忘れて泣き叫ぶ一等航海士の腕をつかまえて揺さぶる。ちょうどレガットが自分の仕事を妨害した男の首をつかんで揺さぶったように。レガットはその男を殺してしまうが、船長は一等航海士を揺さぶりながら命令する。『仕事につくんだ、わかったか。持場につくんだ』——も一つ揺さぶって——『もうやめろ』——もう一つ——『泣きべそはやめろ』——もう一つ——『前帆の綱をゆるめさせろ』——も一つ、も一つ」(141) 船長が手を放すと、一等航海士は「命からがら逃げ出して」“as if fleeing for dear life” (141)

行くのである。このように象徴的なレベルで、船長はレガットの行為を再現している。船長によるレガットの行動の反復は実はこの事件の前にも、一度行なわれているのである。給仕がレガットが隠れている船長室の浴室へ入っていった時、何も物音がしないので、船長は「もう一人の私があの哀れな奴の首をしめ上げたのだろうか」(129)と恐れるところである。船長の想像だけであったのだが、その時の船長はアーチボールド船長のように、「こうなったらもう私自身何をしてかすかわからなくなりかけた」心境に陥ったのである。この時点では船長は、理屈で説明出来ない状況における危機には対処出来なかったことが分かる。

また船長は、霊的な存在としてのレガットから独立するためにも、極限状態を必要としたとも考えられる。コーリン島に近づく場面であるが、船長の危機感を表していると同時に、暗示に富んだ象徴的な情景である。「また静まりかえった。大きな影はますます近づき、ますます高く聳え、明かり一つ、物音一つなかった。船全体は静寂に閉ざされ、黄泉の国の入口にゆっくり漂っている死人の船みたいだった」(140)。光も音も「ない」、のしかかって来る島の影が「黄泉の国の入口」「the very gate of Erebus」なのだが、この闇の国こそがレガットがやって来た所であり、帰るべき所なのである。その入口へ船を出来るだけ近づけることで、船長も象徴的な「死」を経験する。二等航海士は「まるで死んだみたい」にじっと立っているし、船長の声は「無気味」にこだまする。また船長は「いまやもう一人の私はぬけ出して、海に身を沈めようとしている」(141)とレガットが船を去るところを幻視しているが、象徴的には、死霊としての分身が去ること、いわば霊を払って清めを受けることに相当する。新しく生まれかわった船長は、完全な一個人としての独立を手に入れるのである。

レガットが物理的にも精神的にも去って初めて、船長は船との一体感を味わう。「私は船と二人きりになった。そうだ！この世の何ものといえども、私と船との間に入り込むことは出来ない」(143)と語る船長の意識には、いままで船と船長の間立ちだかっていたレガットのことがあったであろう。またコーリンの島影を見て、船長は「そこはあの男、まるでもう一人の私みたいに、私の船室も考えをも秘密に共有したあの男が、自ら罰を受けるべく海に身を投じた場所だ。自由な、誇り高い男が、新しい運命に向かって泳ぎ出した場所だ」(143)と話を終えるが、レガットの「自由」は、文明社会の掟に支配されずに生きる自由であるとともに、船長の心から解放された自由をさしているとも考えられる。

船長は最初、船が危険にさらされている時に、眼前に聳えるコーリンの島影を「見よう」としない。「真っ黒く、ぼんやりした陸の影が、次第次第に大きく迫って来るのを、息をこらして見守っているのはとても我慢できなかった。私は目を閉じた」(139)のであるし、「その間じゅう、陸のほうはとて見れなかった。見て心がくじけるのを恐れた」(141)と船長は恐怖のあまり、「見る」ことを拒否する。しかし視覚的に現実認識を行い、船長としての義務をはたすためには、恐怖心を克己して、「凝視」する必要がある。船長が船の運命を決める決断を迫られた時、船の動きを知るために海面を「凝視」しなくてはならない。「何かを探し求めて凝らした私の目に、舷側から一ヤードと離れていないあたり、何か白いものが浮かんでいるのがはっきり見えた」(142)ために船長は間一髪のところ船を危機から救い、乗組員の称賛と信頼を獲

得し、船との一体感を得るのである。

この「白いもの」は船長がレガットに与えた「私のぺらぺらの帽子だとわかった。きっと彼の頭から落ちたに違いない。彼は気にもしなかったのだ。いまや私に必要なものがあった——救いの目印だ・・・あれこそ私が彼の肉体に突然感じた憐れみのしるし」(142)だったのであるが、反対に船長を助けて船を救う目印となる。この帽子は、船長がレガットの苦難を思いやって与えたものである。しかもそれは単に頭で考えただけの「昼の論理」によって推測された同情ではなく、いわば「夜の不条理」による直感的視覚によって「私自身がはだしのまま、むきだしの黒い髪の毛の頭をじりじりと太陽に焼かれながら、さまよい歩いている姿が目には浮かんだのだ」(138)と、レガットと入れ代わった自分を「幻視」したのである。もし「思いやり」ということが、相手の立場に身を置いて相手の気持ちを理解することとすれば、船長は「幻視」によって文字どおりレガットのことを我がことと思いやったのである。

若い船長が見知らぬ船で、初めての航海に出る時に感じる、不安と孤独感を克服し、乗組員の信頼を勝ち得るには、船長が最初示すような、楽天的な現実認識や甘い幻想では本当の意味での解決にはつながらない。苛酷な現実を勇気をもって忍耐強く「凝視」することで、ロゴス的な現実理解を深めることが大事である。同時に、理屈を越えて物事の本質を直感的にとらえること、眼前にないものを「幻視」することによって、パトス的な真実へ近づくことも忘れてはならない。「昼の論理」では罪人であるレガットを匿い、「夜の不条理」で理解してやるために、船長は苦しみ、船を危機に直面させることになるが、その過程で現実を「凝視」することを学び、真実の共感を「幻視」で得るのである。船長は操船に成功し、乗組員の信頼を勝ち取ると共に、レガットを闇の彼方へ逃してやるのである。五日目の夜が更けてゆく。明日は新しい人間が生まれる日である。

引用文献

- Conrad, Joseph. "The Secret-Sharer: An Episode from the Sea." *Harper's Monthly Magazine*. 121 (August & September 1910): 349-59; 530-41.
- _____. "The Secret Sharer: An Episode from the Coast." *Twixt Land and Sea*. Vol.13 of *The Works of Joseph Conrad*. Edinburgh: John Grant, 1925. 89-143.
- _____. 「秘密の共有者」. 小池滋訳. 『コンラッド中短編小説集』. 第3巻. 京都: 人文書院, 1983. 引用は一部変更したが、この訳を使用した。なおページ数は上記の全集版による。
- Curley, Daniel. "Legate of the Ideal." *Conrad: A Collection of Critical Essays*. Ed. Marvin Mudrick. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1966.
- Guerard, Albert J. *Conrad the Novelist*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press: 1969.
- _____. Introduction. *Daed*. 92 (Spring, 1963): 204.
- Hewitt, Douglas. *Conrad: A Reassessment*. Cambridge: Bowes & Bowes, 1952.
- Palmer, John A. *Joseph Conrad's Fiction: A Study in Literary Growth*. Ithaca: Cornell University Press, 1968.
- Priestley, Philip. *Victorian Prison Lives: English Prison Biography 1830-1914*. London: Methuen, 1985.
- Stallman, R. W. "Conrad and 'The Secret Sharer'." *The Art of Joseph Conrad: A Critical Symposium*. Ed. R. W. Stallman. East Lansing: Michigan State University Press, 1960. 275-88.

Steiner, Joan E. " 'The Secret Sharer': Complexities of the Doubling Relationship." *Modern Critical Views: Joseph Conrad*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1986.

原稿受理 1988年1月8日